今年度の研究例会では、古代日本の飛鳥や京都、近世・近代のベトナムの地域社会で展開された政変・火災や葬送制度、仏教信仰の様相について、文献史料・考古資料・金石文などに依拠して比較・検討を行った成果が報告された。

第一に、貞観一八年（八七六）三月の平安宮大極殿炎上前後の状況を分析して、応天門の変の処理に関する自身の判断を後悔した清和天皇が、伴善男の怨霊を強く意識し、それが清和の退位・出家をもたらした可能性を指摘した。蓋然性の高い推論であり、都市中枢の被災が政治指導者の宗教観に与えた影響の強さを実感させた。第二に、大和・摂津・河内の終末期古墳にみられる棺台を集成して検討し、7世紀前半に飛鳥において出現し、構築型（Aタイプ）から設置型（Bタイプ）へと変遷すること、朝鮮半島の百済・新羅からの受容が想定できることなどが論じられた。東アジアのなかで葬送制度の変化を考えた意欲作であった。第三に、ベトナム最古の寺院の一つである紅河デルタ地域の二つのケオ寺に赴き、資料調査を行った結果が発表された。一七世紀初頭に水害のため壊滅し、紅河の左右岸に再建されたケオ寺に残る文化遺産のうち、碑文・神勅（勅封）・典籍などが写真と釈文により紹介され、今後の課題が述べられた。漢字で書かれた碑文や神勅にはベトナム独自の文化がうかがわれるとともに、中国文化の影響も垣間見られた。

都市における火災や災害が古代人の信仰に影響を及ぼすこと、朝鮮半島から移入されたモノが日本の葬送制度に影響を与えたことなどが確認されるとともに、漢字と仏教を共有する東アジア諸国のなかの一例としてベトナムの仏教事情が理解できた。これらのことをめぐって、活発な質疑応答が行われた。（主幹／西本昌弘）

貞観 8 年(866)の応天門の炎上は、藤原良房による摂政制の成立の契機となった。そして陽成天皇のとき良房の後継者基経による関白制の成立にいたる。本報告では、この間の政治過程について清和天皇を主体として検討した。応天門の変の時 17 歳であった天皇は、否認する伴善男を首謀者と断定し伊豆国に配流し、善男はそこで死去した。当時、善男は怨霊となったと考えられたらしい。その後、災害や不審火が続き清和天皇は退位を思ったらしいが、皇子が成人するまでは留っていた。応天門の炎上からちょうど 10 年目のほぼ同日、王権の象徴である大極殿が炎上した。天皇はこの炎上を伴善男の祟りと認識し自身の不徳を痛感して、半年後ついに未成人の皇子に譲位し(陽成天皇)、基経を摂政に任じた。伴善男の怨霊と 10 周年記念日の大極殿炎上は、藤原基経の権力確立の重要な要因となったのである。（研究員／鈴木景二）

本報告では、報告者が 2023 年に実施した、ベトナム・タイビン省ケオ寺とナムディン省ケオ寺及び周辺地域の寺廟調査と収集資料について、その概要を紹介した。ケオ寺（漢字名は神光寺）は、11 世紀に紅河下流域に創建され、17 世紀に洪水被害を受けて壊滅した。地域の住民たちが紅河の左右に分かれて移住したのに伴い、ケオ寺も左右両岸に再建されて現在に至り、紅河を挟んで左岸（タイビン省）・右岸（ナムディン省）に二つの「ケオ寺」が対峙する状況となっている。今回の調査では、両ケオ寺が所蔵する碑文・神勅（朝廷より各地の祠廟の神格にくだされた公認文書）・写本・古典籍の撮影等を行うことができた。ナムディン省ケオ寺で

は近隣の祠廟にくだされた神勅も保管しており、タイビン省ケオ寺所蔵の古典籍からはケオ寺同士で典籍の貸し借りが行われた形跡が見つかるなど、当該地域での寺廟間や周辺村落との関係を示す資料が多く残っており、今後さらなる分析を進めたい。（研究員／宮嶋純子）